

「ペルー日本語教育セミナー」の講師として

佐藤 幸子

(1)

2週間ぶりの我が家であった。ペルーから無事帰国した感動は大きかった。例の日本大使公邸人質事件以来外務省の非常事態宣言地域に指定され、パツタリ観光客が途絶えてしまったペルーへ「日本語教育セミナー」(ペルー日本語教師会主催, JICA ペルー事務所, ペルー日系人協会日本語普及部後援)の講師として, 12月31日夕方成田を発った。この話がでた時, 12月31日に日本を離れるということに私はたちまち引き付けられてしまった。なんというエキサイティングなことだろう。単細胞で珍し物好きな私はたちまち心を決めてしまった。20代の時に古い歴史と効率的な日本語教育で有名な東京日本語学校(通称『ナガヌマスクール』)の講習を受けてささやかな資格を持っていて, 今も同窓生の末席を穢している。たまに外国人留学生に日本語を教えることを依頼されたりもしたが, しばらくはそんなこともなく過ぎてきた。外国人に日本語を教えることが好きな私は久しぶりにその楽しさを経験できると思うと気持ちが弾んだ。ところが, 対象はペルー各地で日本語を教えている日本語教師であるということを知った時にはときすでに遅く, ひっこみがつかなくなっていた。さすが非常事態宣言区域だけあって様々な行き違いがあり, 二転三転して赤くなったり青くなったりした揚げ句, なんとか予定通り31日に成田を飛び発つことができた。講師は東京, 浦河, 小樽からの3人とペルー日本人学校からの2人の5人であった。

シカゴ, マイアミと2カ所で乗り換えて25時間後現地時間1月1日早朝5時リマに到着した。シカゴもマイアミもリマの空港も1月1日のせいか静かであった。リマの空港の近辺はうす汚れた家並みが続いたが, 町の中心に入ると少しずつ近代的な建物が現れ, 人々の姿も見られるようになった。元日の早朝というのに, 三々五々連れだっでのんびり歩いたり, 立ち止まったりしている。大晦日はディスコなどで踊りあかすのだという。ハイヤーもバスも満員で, 値段も3倍位にはね上るのだそうだ。バスの停留所も時刻表もなく, いつでもどこでも客を乗せるのである。

1月1日だけはトヨコペンションに泊まった。ここは例の早稲田大学の学生がジャングルで殺害された事件の折, 彼らの両親が宿泊したとのことで, オーナーはひとしきり当時の苦労話をしてくれた。外務省, 大使館, 新聞社ありとあらゆる所から電話が入り, 2日間というもの食事もシャワーもまともにできない状態だったという。彼らはボートに乗って, いったん止まらなければならない国境をそのまま通過しようとしたらしい。スペイン語もできず, その国のルールも知らず, まさに無謀そのもので, 片道切符の特攻隊同様の行動であったらしいことは, 当時日本にいた私達にも充分察しのつくことであった。その上残酷なことに, 彼らの頭部, 手足もバラバラに切断して川に投げこんだとのこと, この国ではこういう事件でもほっておかれるらしいが, フジモリ大統領の命令で主謀者は捕らえられ, 25年の刑に服している。しかし彼らが25年服役するとはだれも信じていない。恩赦, 恩赦で実際にはどれくらいになるのだろうか。

ペルー人にとって憧れの国はなんといってもアメリカである。夕食においしい鰻がでた。毎月大使館員が交替でアメリカに息ぬきに出かけ, 大いに羽根を伸ばすかどうかは聞きもらったが, 帰りにたくさん買物をしてくるのだそうだ。だから日本の食物でもたいていのものは手に入るそ

うだ。

その夜トヨ子さん（前述のペンションの女主人）の女友達2人と一緒に近所の「ビンゴガーデン」という店に連れていってもらい、ペルーのビンゴを楽しんだ。ビンゴの後、そのレストランに寄って色々な客と話したが、こちらはスペイン語ができない、むこうは日本語ができない、むろん英語は通じない、えらく苦勞したが、中年の夫婦と話している内に日本への出稼ぎが多く（彼もその1人だが）正月などにペルーに帰ってくることを知った。客も店のウェイターも人懐っこく、きそってカメラに入ろうとした。帰りは夜中の12時近くであったので、ごく近い所であったが私がハンドバックを持っていたので、大人3人でもハイヤーで帰らなければならないというところに、この国の治安がおしはかられた。

次の日から3日間はクスコに泊まり、マチュピチュの空中都市など有名な数々の遺跡を堪能した。ここは日本の富士山とほぼ同じ位の高さなので、高山病にかからないよう、どんなに元気であっても、着いてから2時間は静かに横になっているようにとしっかり注意を受け、私はその通りにお姫様のようにことりとも音をたてずにベッドの中にいた。しかし同行のT先生は見事に高山病に罹り、激しい頭痛に苦しみ、2日間はベッドの中であった。こんな時寝てばかりいるのは逆効果で、時々部屋の窓をあけて空気を入れかえたり、水を大量に取るのが良いそうだ。私を案内してくれた現地の旅行社が親切にも1人ベッドで心細く寝ている彼に電話でアドバイスを与え、これで彼はすっかり元気をとりもどし、最後のマチュピチュには参加することができ、私もほっとした。

5日の朝9時すぎにクスコを離れたが、なんと定刻より5分ほど早く飛行機が出発して、リマに着いた時には迎えの人が間に合わず、我々は一瞬当惑するという一幕があった。遅れるのは日常茶飯事と聞いていたが、早くなるのは頭になかった。

リマには日秘会館という大きなビルがあり、そこでは日系人の種々の会合が持たれていた。日秘会館の入口には24時間ガードマンがいて、出入りするすべての人達の身分の確認と荷物の点検を行っていた。荷物の点検は空港におけるやり方と同様である。そのための費用は莫大なものであるが、夜間閉館すると泥棒が侵入したり、ガラスが割られたりして危険なので、24時間開けておかなければならないのである。

夕方そこにある日本語教師会の事務所で打ち合わせをした後、“Dandan”という日本レストランで我々の歓迎会が行われた。

6日午前9時から開会式。ペルー日系人協会会長、日系人協会日本語普及部部長、そして我々講師達の挨拶があり、そのあと早速講義が始まり、トップバッターは不肖私であった。

(2)

私の講義は考えれば考えるほど夜も眠られなくなるほどエキサイティングな主題である言語の起源から始まった。言語はどのようにして出来てきたか、世界で最も古い言語は何か、その実験をしたエジプト王プサンメテイコス I (B.C. 7C), 神聖ローマ皇帝フリードリッヒ II (1194~1250) について、そして言語学、英語学といささかでも係わりを持った者にとってはあまりにも懐かしい学者であるデンマークの言語学者オットー・イエスペルセンの言語の起源についての5つの説の紹介、そして子供というものは生まれてからどれくらいしたら言葉というもの、思考というものを身につけるものか、何歳位から文章作品を書くことができるか、最も小さい幼児の作品（2歳の作品を知りたいと思ったが、結局3歳からの作品であったが）の紹介、それに

引き続いて世界中の諸言語について、世界語の中における日本語やスペイン語の位置、そして現代の日本語をめぐる様々な問題について話した。

その後、日本語教授法のひとつとしての俳句作り（これはニュージーランドで効果的な教授法と教えられた）、短歌については第2日目に披露する茶道と深く係わりを持つ宮中歌会のこと、茶道と関係深い禅の言葉の紹介、最後は筆者のあまりにも平凡な名前に端を発した人名の話から、いつも学生を昼寝から起こす珍名・奇名で終わった。会場大いに沸き、めでたい初笑いであった。

2日目は、代表的な日本文化である茶道を通して日本文化、日本人の価値観などを述べた。前半は茶道の歴史について語り、後半はお点前を披露して、理論と実践という形をとった。

729年聖武天皇が奈良の宮廷に100人の僧を招待した茶会、801年に僧最澄が茶の種子を中国より土産として持参したことから話を始めた。当時は貴族、僧侶などごく一部の上流階級しか茶をたしなむことはできなかった。中国唐代の団茶、宋代の抹茶、明代の煎茶、そして辻利右衛門の発明による玉露の話、岡倉天心の「茶の本」、特に宋代で行われ鎌倉末期に我が国に入ってきた闘茶の話は笑いをよんだ。闘茶は茶の出所をあてる1種の賭だが、茶会の前の100人の男女混浴の話、茶会のあとの大宴会、酔いつぶれるものあり、博打に興じるものあり、その光景を弁当持参で遠くから見物に来る者あり、また茶会の約束をわざと破るのが粋とされたり、現代の洗練された茶道からは想像もつかない墮落ぶりであった。そこから茶道の中興の祖紹鷗、茶道の教祖とも言うべき利休の話、明治になって日清、日露戦争による未亡人の生活の手段となったことから茶道が男性から女性に移り、戦後の男女共学の総合大学の茶道クラブで話を終えた。

会場にはほど良い高さの舞台があり、その上に花ゴザを敷いて電気式の釜をおいた。客を募集すると、我も我もとあっという間に4人が舞台の上に座ってくれた。ニュージーランドにおけると同様に、この辺が内向的な日本人と違って積極的である。

茶道具を貸してくれたペルー裏千家協会幹事長奥山夫人がワンピースに裸足という格好で急遽、半東（助手）をつとめることになり、このいでたちも外地ゆえ許されることとなんとも可笑しかった。しかし彼女は品格のあるいかにも茶人らしい方であった。

会場の皆さんには懐紙と小樽から持参したお菓子を配ったが、お茶の方は勘弁してもらった。

ラテン系民族であるペルー人は明るく、おどり好きな民族である。なにかといえはすぐ踊り出すのを知って、厚かましくも茶道のあとは私の下手な盆踊り（？）「さくら」で締めくくった。

3日目は熟語の誤用、敬語について、音読み、訓読み、漢字の間違い探し、最後は「ことわざ人生劇場」と銘打って、男女、親子、夫婦に係わる諺を紹介しながら、ご当地ペルーにおける人間関係をひきあいに出してもらい、和気あいあいと講義は進んだ。ひきつづいて絵を使用した初心者用の日本語教授法を紹介した。これは札幌で外人に日本語を教えている私のゼミの卒業生——ワーキングホリディでニュージーランドに1年いる内に見事に英語を話せるようになった——からその秘伝を授かったものである。まさに「負うた子に教えられて浅瀬を渡る」である。

小樽の音楽の先生が日本の歌（「さくら」「ふるさと」など10曲ほど）をテープに編集してくれたものを楽譜と共に持参した。最初はしんみりとした曲であったが、後半は明るいサンバ調の曲で、おどり出す学生もいた。そして最後はお馴染みの「しあわせなら手をたたこう」を合唱して、歌詞の通り「肩をたたたい」たり、「足をふみならし」たり、こうして賑やかに私の拙い講義のフィナーレを飾ることができた。最後の挨拶を終えた時、大きな声で「ブラボー」とさげんでくれたことは何より嬉しいことであった。

受講生の年代は様々であったが、中年の女性が比較的多かった。日本の中年女性とはちょっと

タイプが異なっていて、日本人の長所である誠実さ、勤勉さとペルー人の長所である明るさ、素朴さを持っている様に思われた。受講生の中にはペルー人やジャングルの中で日本語を教えている人もいるとのことで、同じように日本人が移住したカナダではもうほとんど日本語が重視されないことを思うと、我が日本語教授にご苦労されている人達がいることはうれしいことであった。

(3)

1996年12月世界中を驚かせた「ペルー日本大使公邸人質事件」以来日系人の新年会は中止されていたが、今年はいじめて日秘会館の大ホールで新年会が持たれた。「もちつき大会」と称して招待状も出さず、そのニュースは口コミで日系人社会に伝えられた。入口では小西大使夫妻とペルー移住100年記念行事委員長の丸井氏、今井氏（フジモリ内閣における前スポーツ大臣）が我々を出迎えてくれた。パーティの最初に「年の初めのめでたさは……」の歌（はるか昔小学校の時歌ったきり）を2番までしっかり歌うのには驚いた。たくさんの人が交替で杵を持ち、笑いの渦の中賑やかにもちつきは終了し、まもなく赤いお椀に入ったお雑煮が配られた。クッキーの型でぬいたらしいかわいいお餅と椎茸などが入っていて、特にだしは美味で本物の日本の味であった。お盆に黒塗りのお箸がザラザラと入っていて、「1本ずつ取って下さい」にはまいった。かくして生まれてはじめて1本のお箸でお雑煮を食べるといふ珍しい経験をした。

あまりご馳走は出ないという噂であったが、実際は様々のオードブルが出され、なかなか豪華なパーティであった。そのうち、舞台の方で本年5月の移住100周年記念祭を成功させようという丸井氏の強烈なアピールがあり、ひきつづいて何人かのゲストの新年の挨拶の後エンタテイメントに入った。歌あり踊りあり、まことに楽しい新年会であった。なんと我々のペンションの女主人の野田夫人ら4、5人のコーラスがあった。彼女はかつてNHKのど自慢で優勝したとのこと。ここの日本人の集いでの踊りはつねに日本の民謡である。花笠をかぶった大変華やかな民謡踊りであった。そのころにはウェイター達が舞台に向けて椅子を並べはじめ、年配の人達が座り始めた。まことに心憎い運びである。すべてがなごやかに流れる如くごく自然の内に進められていくのであった。玄関の生花や盆栽など見事なもので、ここには日本以上の日本があった。

(4)

今年は小樽での初釜には出席できなかったが、ペルーの初釜に出席できたことはなにより嬉しいことであった。日秘会館の広い会場の円テーブルに客が座り、奥山夫人の司会によって、新年の挨拶、そしてこの時も5、6人の婦人達が出て会場の人達と共に「年の初めのめでたさは……」の合唱である。私などははるか昔に歌った記憶があるものの、今の若い人達はほとんど知らないのではないだろうか。テレビできいたことがあるという人がいた。またこの歌を歌ってするゲームがあるらしい。

会員の心づくしの点心（お盆に赤飯、煮物、刺身などがのっている）が供され、なごやかな雰囲気の中でそれをいただいた後、庭づたいに（見事な日本庭園であった）茶室に向かった。数年前のペルー大使が茶道に理解があり企業に寄付を募り、たちまちの内に立派な茶室を作ってくれたとのことであった。座敷を取り囲む回廊下のような土間には赤い毛氈の敷かれた椅子が数列置かれ、客はそこに座って亭主のお点前を拝見するのである。客人の数は40名前後であったろうか。飾りの結ばれた立派な棚には見事な茶道具が置かれてあった。最初にお菓子（あーなんと裏千家の正月用の正式な菓子である花びら餅であった）が出されたが、2列目の我々には先頭か

らではなく、端の私から配りはじめた。そしてお菓子を渡した若い女性の爪は白くマニキュアが塗られ、やはり外地だなーとなんとなく可笑しかった。

ただこちらで除夜釜という言葉は何度か聞いた。生まれてはじめて耳にした言葉であった。「さあ、私は聞いたことありませんけれど。帰ったら調べてみます。」帰国するなり調べてびっくりした。除夜釜はたしかにあるのだ。しかし日本の除夜釜は茶道の先生クラスの人達が31日に最大5人位でごく内輪でするものとのことだが、ペルーでは初釜の様にたくさんの人が30日に集まるらしい。それにしても、ニュージーランドにおいても時折経験した様に、外国でそれまで知らなかった日本文化の一端をまたも知らされたのである。なんとも恥ずかしい思いである。

(5)

6日の午後、3人の講師の講義が終わった後リマの日本人学校を訪れる。ここは砂漠地帯とのことで周囲には木がなく、風が吹くとすぐ校舎は真白になるのだ。入口には守衛がいて確認してから人を入れる。目下校舎を治安整備のため修理中で大工が入っていた。重装備をすればするほど費用はかかるが、備えあれば憂いなしとのこと。校舎を一巡して楽器室に入った時、一見なにげない様子で様々の楽器が置かれてあったが、実はいざとなったら籠城できるようになっていることを知る。上の窓には鉄の覆いがさっとおり、弾丸を通さない様扉は5センチ位の厚さの鉄で出来ているとのことであった。校庭で夕方のそよそよと吹く風の中冷たいジュースをいただきながら、車の話に花が咲いた。日本社会と異なって夫と妻がそれぞれ車を必要とするのだが、この先生方は運転手を雇って、運転手は先生を学校に送った後、奥様を買物などに連れていくのだ。2台の車を持つより運転手を雇った方が事故の時のことを考えるとずっと安全だそう。すべて運転手の責任にすることができるし、事故処理などはペルー社会を知らない日本人にはどうても対処できないことであるとの話であった。

(6)

リマの有名な天野博物館はきわめて珍しい予約制の博物館である。6日セミナー終了後ここを訪れ、収蔵品のレベルの高さに啞然とした。人形、壺、織物などそのデザインのユニークなこと、優れていること、ピカソ顔負け、現代のデザイナーも及ばぬものである。プレインカ時代すでに絞りやレースがあり、織物サンプルでおかみさん達は自分の好みのものを注文したのだ。

創立者の故天野芳太郎(1878-1982)は秋田に生まれ南米で多くの事業に成功した後、プレインカであるチャンカイ文化の遺跡の発掘、研究に心血をそそいだ。彼は偏った欧米中心主義が世界を牛耳っていることを愁いて、コロンブスが新大陸を発見するはるか以前に南米には旧大陸以上に優れた文化があったことを常に訴えていた。1956年東大の泉靖一助教授が天野氏に出会ったことから東大にアンデス考古学講座が設けられ、1958年第1回東京大学アンデス地帯学術調査団がペルー全域にわたる調査に出発した。以後40年間17回の調査団を派遣し、それまで不明であったアンデス文明に関する数多くの発掘、発見を続けて世界の考古学の発展に寄与している。

この博物館に関する資料を数冊手に入れたが、帰りの飛行機の中で読んだ天野氏の「我が囚われの記」(1943)は第二次世界大戦中にアメリカの収容所にペルー日系人が囚われた時の記録である。かなり過酷なことの多い辛い収容生活であるのに、全体を包む明るく、ユーモラスな雰囲気は感動的であった。天野氏は近衛元首相が戦犯として追放されそうになった時、近衛氏を南米に亡命させる計画をたてたが、近衛氏は服毒自殺をしてしまった。

天野氏は数々の叙勲の榮に浴し、彼が亡くなった時にはペルーの新聞は賞賛に満ちた記事にあふれた。昨今大いに話題になっている国際交流を見事に果した人であった。

(7)

当然のことだがペルー日本大使公邸事件についてたくさんの人が様々のことを話してくれた。あの事件のあと私は札幌で青木大使の講演会に出席したが、それは必ずしも好評ではなかった。日本ではさんざんであったが、彼はペルーではなかなか評判が良い。彼はやたら友人の多い人で、ペルーでは外国の大使館が1,000人、2,000人の客を招待するのは普通のことだそうだ。救急車でやって来たので不可抗力であったと人質になった寿司やの旦那は言った。前任者は昼間ひっそりと天皇誕生日を祝っていたそうだから、はたしてそれが普通かどうかは判断できない。

南米では革命分子（武装ゲリラ）は人質を捕まえるやすく殺すのが普通なので、今回の様に生かし続けたのは珍しいそうだ。それには事件が起こった途端に日本から外務大臣が飛んで来たことが与って力あったとのこと。フジモリ大統領は革命分子を引き受けてくれる様、キューバなどに交渉に出かけたがあれはジェスチャーであって（そうでなければ、橋本首相がトロントでのフジモリ大統領との会談のため苦渋に満ちた表情で政府専用機に乗りこんだのに比して、彼はアメリカ留学中の息子をホテルに呼んで雪合戦をする余裕などあるはずはない）、こういう場合最後は全員殺害するケースがほとんどであるときいたが、この問題もいろいろと複雑のようである。

経済状況が良くないので、フジモリ大統領の最近の人気は下る一方である。代わりにリマ市中心にあった泥棒の巢窟である闇市を一掃したリマ市長（2000年の大統領候補のひとりとか）の人氣がうなぎ上りである。その問題は長い間の懸案事項であったが、これまでどの市長も手がつけられなかったことであった。そこに住んでいた人達は今はずっと丘の上の方へ移り、そこは電気も上下水道も完備していないたいへんな無法地帯である。

フジモリ大統領になってからペルーはすっかり変わったという。世界銀行その他世界各国からの援助によって国を整備して、人々はやっと人間らしい生活を送れるようになったのだ。今は立派な道路がついているが、かつては空港から町の中心までの道路はぬかるみでたいへんであった。人々の服装もかつては乞食同様であったが、今はそういう写真の被写体向きの人はなかなかお目にかかれない。しかし人間、特にラテン系の民族はのど元過ぎればのタイプで忘れっぽく、フジモリ氏以外の人物が大統領になってはじめて、あーしまったということになるであろうとは何人かの日本人から聞いた。国民はフジモリ氏以外のペルー人が大統領になれば、必ず一族の私腹を肥やすことに専念することになるであろうということも充分分かっているそうだが、人間というものはどうしようもないもので、同じ人が長くその地位にいると飽きてしまい、自分達の受けた恩恵の大きさも馴れると忘れてしまうのだ。しかし、一度上がった生活レベルというのは下げることは難しいだろうとも言われている。ただフジモリ氏の側近はこの国らしく（？）大いに袖の下を取ったり、私腹を肥やしたりしているということは噂されている。

丁度夏休みで大統領官邸の前庭には衛兵の交代を見るため、たくさんのペルーの小学生達が集まっていた。官邸の二階から彼らを見下ろしている我々を、まるで珍しい見せ物を見るかの様に見ている彼らの様子がなんとも可笑しかった。彼らはこの後官邸の食堂でランチをご馳走になるそうだ。フジモリ大統領以前にはこういうことは考えられなかったそうである。

(8)

一握りのペルー人は大金持だが、多くは貧しい。日系人はペルー人をお手伝いとして雇っているが、盗難が多く社会福祉と割り切らなければならないと言う人もある。しかし私の泊まった野田ペンションのお手伝いは実に正直者の働き者で、日本のクリーニング屋が落とせない足袋の汚れを見事に落としてくれた。その娘（7、8歳位）は野田夫人が孫の様に可愛がって、母親は通いだが、彼女は野田夫人を「おばあちゃん」と呼んで一緒に暮らしている。

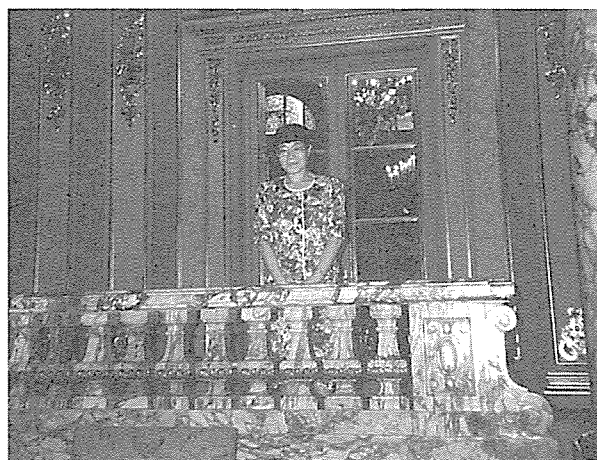
我々をディスコに案内してくれた坂口夫人の所には50歳位のペルー人の召使いがいる。9歳の時から彼女の所で働いて、1人、2人のガールフレンドもいたが、結婚すると彼女の家を出なければならないので、結局独身を通してのとのこと。しかし最近は経済的にも厳しく、そういう古き良き慣習は少しずつ失われてきているとのことである。

ペルー社会において日系人は努力を重ね、二世、三世はかなり良い暮らしをしている。日系人は結婚などによってペルー人と同化することは少なく、ブラジル、ボリビアなどと比べてペルーの日系人社会はひとつにまとまって、日本の伝統を大切にしている。日系人達のレベルは高く、のんきなラテン民族の社会において日系人の大統領がでるのは当然のことも私には思われたが、このことについては、ペルーの歴史、政情など語るべきあまりにも多くのことがあるのでここではこれ以上のことは述べない。ただフジモリ氏が十年前立候補した時は本人以外はだれ1人当選するとは思っていなかったという嘘のようなホントの話である。我々が大統領官邸のバルコニーから衛兵の交代を見ていた時、左手の正面玄関に要人を見送るため大統領が出ていらした。

フジモリ氏は2000年の大統領選挙に向けて、最近内閣の改造を行った。景気を回復するべく土木工事を行って国民に仕事を与えるとのこと。憲法は3選を禁止しているが、国会を閉鎖して法律を改正してしまった。むろんそれは個人的な野心からなどではない。もし2選で退いては、この国はまた元に戻ってしまう。これまでの彼の努力は水泡に帰してしまうのだ。大統領選挙は国民による直接選挙である(棄権した場合はかなりの罰金である)。1年後ペルー国民はどう判断を下すであろうか。これはかなりエキサイティングな賭である。いつもの様にどなたかとフランス料理でも賭けたいと、私はまたもけしからぬことを考えている。



新年会にて：小西大使夫人と共に



大統領官邸にて：厚かましくもフジモリ大統領が記者会見の時、お立ちになる場所で